



センター長に就任して



先端基礎研究センター長 ■安岡弘志■

伊達前センター長の卓越した指導のもとに順調に成長し発展を遂げた先端基礎研究センターをお預かりし早2ヶ月がたってしまった。日本原子力研究所という膨大な組織、また、そのなかで多岐にわたる先端的研究を行っている当センターの全貌をとて掴んだという状況ではないが、これまで過ごしてきた大学の研究スタイルとは全く異なる姿が漠然と浮かんできている今日この頃である。

そもそも現代社会の文明は物質が醸し出す様々な機能や特性に基礎をおいているといっても過言ではない。原研の基礎研究は我が国の原子力開発を支援し、また、その基礎を確立することを目的とすると謳われている。原子力にかかわる新たな原理の構築や新物質、新現象、新技術の発見を目指す基礎研究もその対象はやはり“広い意味”での物質に研究の場を見いだそうとしている。ここでいう“広い意味”は、一般的にイメージする形があり目に見える固体に限らず、遺伝子を含む生体分子や高分子を含む複雑系物質、更には、原子核分野の素粒子まで広がった我々の研究のターゲットとして捉えていただきたい。このような考えにたつと、既存の物理、化学、生物、工学、医学等といった学問分野の区分そのものが意味をなさなくなり、いわゆる学際的な研究姿勢が要求されるようになる。この様な研究の動向は世界的にみても時の流れとして鼓動を始めており、我々のセンターは先陣を切って先端的学際研究を展開する事により、この流れを先導していく使命を担っていると思う。当センターの特徴の一つは、研究者があるプロジェクトのもとで自由な発想で研究を展開できることにあると思う。しかし

ながら、研究に携わっている皆様、特に若手研究者諸君、に期待したいことは、この自由な発想の中に視野の広い研究姿勢を常に培って頂きたいことである。一昔前は、研究者は“一芸に秀でるべきである”と言われた。これからは、一芸に秀でると同時に“多芸に秀でる研究者”に成長していただきたい。当センターでは、多岐にわたる先端のかつ学際的な研究が展開されており、かつ、まもなく研究交流棟での共同生活が始まろうとしている。この様な環境で、そのようなことが可能になる絶好の研究場所であると思う。

センター内での研究活動もさることながら、これからは外部研究者との連携も重要になるであろう。今年度からスタートした新村グループが関与する農業生物資源研究所との開放的融合研究の例を取ってみても分かるように、他省庁の関連する研究組織と連携した研究も、時代の流れとして、推進していくことになるであろう。更に、センターの国際化も重要な課題となろう。国際的な研究の発信基地としてのセンターの役割も重要となり、著名な外国研究者がリーダーとなるような研究グループも立ち上げてみたいと思っているところである。

省庁の統合や大学の独立行政法人化等、我が国の研究教育体制が大きく変わろうとしているこの時期に、第二期に入った当センターをいかに発展させるか思いを馳せている。新たな重責を負ったようで身の引き締まる思いをしているが、研究者や職員皆様のご協力の下に、この特徴ある研究組織を国際的研究拠点として発展させたいと念じている。